

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2010年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院 コミュニティ福祉学 研究科 コミュニティ福祉学 専攻		
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年		氏名
	コミュニティ福祉学研究科 コミュニティ福祉学専攻 5年		岡田 哲郎 印
<b>指導教員</b>	所属・職名		氏名
	立教大学 コミュニティ福祉学部 教授		森本 佳樹 印
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然 ・ 人文 ・ <input type="checkbox"/> 社会	<b>個人・共同の別</b>	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
<b>研究課題名</b>	岡村重夫の「民俗としての福祉」概念の検討		
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年		氏名
	立教大学大学院 コミュニティ福祉学研究科 コミュニティ福祉学専攻 5年		岡田 哲郎
<b>研究期間</b>	2010 年度		
<b>研究経費</b>	200 千円		

**研究の概要** (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、岡村重夫が提起した「民俗としての福祉」概念の現代的可能性を追求するものである。「主として輸入文化に支えられた官製社会福祉や専門家の社会福祉論」を換骨奪胎する土台として「民俗としての福祉」があるという岡村の二重構造論的な認識を基本的な枠組みとして、とりわけ今回の研究では、各地のフィールドワークに基づく帰納的方法で、この概念の内実を埋めようと試みた。

特に、小規模多機能ホーム「いつでんどこでん（熊本県山鹿市）」の実践過程を通じて、「地域力」や「共同体（コミュニティ）」の今日的意味を考察・表現したことは、「民俗としての福祉」概念の核心と射程を定める上で、有益な作業となった。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 民俗としての福祉 ] [ 地域力 ] [ 共同体 ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)**1 これまでの研究**

「地域社会の発展を下支えする『風土』、その中育まれた『生活者の論理』。それら『基底部分』を掘り崩し、分解させる可能性のある『外来の上部構造』には、『生活者の見解』を鋭く対置する必要がある。たとえそれが土地に利益をもたらす『社会福祉』や『外来文化』であろうと、私達にはそれを地域社会の発展に向けて換骨脱胎する土台と行為が必要なのであって、まさしくその『基底部分(土台)』の認識を与え、『生活主体者の論理(行為)』の方向付けをなすものが、『民俗としての福祉』である。」(岡田・森本:2009)

研究代表者はこれまで、地域社会の持続的・調和的発展を阻む一面的な「開発」論理、その果てに予想される「カタストロフィ」を回避するための実践的論理として、岡村重夫の「民俗としての福祉」概念の現代的意味・可能性を、氏の他著作との関連のもとで演繹的に導出する作業を進めてきた。上記引用はその成果として、岡村重夫の論稿「福祉と風土—民俗としての福祉こそ基底」(1976)を精読し解釈した、「民俗としての福祉」概念の暫定的意味である。

**2 東日本大震災を経験して**

2011年3月11日、「カタストロフィ」がおこった。とりわけ、本研究の言う「開発」の、象徴的で具体的な存在としての「原発」。それが不気味に静かに、白い煙をたゆらせる姿をテレビの画面越しにみつめながら、「世界が変わった」ことを認識した。

永続的に影響を残すだろう大量の放射性物質の拡散は、食や健康への直接的ダメージはもちろん、自然や歴史、思い出や関係が蓄積された故郷を、人々の手から根こそぎに奪い、差別や対立の芽も生み落とそうとしている。食糧、経済、金融、人間関係、ケア etc、今後誘発して起こることが予期される幾度かの連続的「カタストロフィ」の局面を、私達はどうか乗り越えられるのか。

あの日から、上記の研究課題は、回避する対象から乗り越えるべき対象に変わった。また、客観的にみつめる研究対象ではなく、自分自身が否応なくその現実の中に投げ込まれた。日々の生活そのものが研究であり、生きることそれ自体が、「開発」を乗り越える実践的論理を積み重ねていく過程であると認識するようになった。

4月15日現在も、福島第一原発は依然危機的状況が継続している。そうしたさなかでも「原発」の必要性を強調する人々がいる一方で、足元から命に結びつき、まともな関係と暮らしを築こうとする人々の姿もみえ、まるで「原発」が鏡のように、狂気と希望を映しだしているかのようだ。上記のように、研究の根本的な再考を余儀なくされている状況にあるが、世界の成り立ちが身近に感じられる貴重なこの時代に、様々な立場にいる信頼できる人々と共に、今の現実を重層的・多面的・身体的に刻む経験が、後の研究活動に大きな意味をもってくるものと考えている。

**3 研究方法および調査地**

こうした時代的変動から、研究のあり方に再考を求められている現在であるが、実は「開発」を巡る地域社会の動向には、3.11以前から緊迫した状況があった。たとえば、山口県上関町祝島の対岸4キロ地点の田ノ浦では、2011年2月21日、原発建設に向けた埋め立て工事が強硬着手され、それに対し、祝島島民と全国から集まった思いある人々が抵抗活動を展開していた。沖縄基地にまつわる問題もまたしかりであるが、いわば、「生活者」の論理と一面的な「開発」の論理の葛藤状況が、局地的に鮮明化された今年度であった。

そうした状況のなか、過去の岡村著作から演繹的に「民俗としての福祉」の論理を導出していく作業は一旦休止し、今起こっている現実をありのまま捉えることが、取り組むべき研究の方向性であると判断した。すなわち、フィールドワークによる帰納的方法で、「民俗としての福祉」の論理を現実の中から浮かびあがらせる方向へと、研究計画当初の予定を大きく軌道修正することとした。

本資金制度により訪れた主な調査地は、福岡県大牟田市(2011年2月4日～6日)、山口県上関町祝島(2011年3月14日)、熊本県山鹿市(2011年2月7日～12日、3月15日～20日)、以上である。これらの調査は、「『地域の力』を捉える、とはどういうことなのか」について、自分なりに思索を深める過程でもあった。以下は、その成果としての考察メモの抜粋である。

「その地で生まれつつある関係や活動のプロセスをみて、そのコアにできるだけ近づく。そしてそれがど

## 研究成果の概要 つづき

のような環境と人間関係のもと生まれてきたのか、土地の風土や歴史、文化に関わらせてみる。その際最初から固定した枠組みをもち、できるだけその地の人々の考えや立場にたって捉えてみる」

これは「開発」論理を乗り越える「民俗としての福祉」の具体的な力を発見するための作業に他ならない。その試行錯誤の過程で得た主な成果として、ここでは、熊本県山鹿市大道校区白石十三部「いつでんどこでん」における調査レポート(岡田・八木田・森本:2011)について記しておく。

### 4 小規模多機能ホーム「いつでんどこでん」の地域移行後の取り組みに注目して

小規模多機能ホーム「いつでんどこでん」の運営が、2009年、NPO法人「コレクティブ」から地域住民によるNPO法人「よんなっせ山鹿」に正式移管された。このレポートで描いたのは、異なる世代・立場の人々が日常的に交流できる「拠点」を得ることで、自らの地域のあり方、地域にあった「ケア」のあり方を足元から考えはじめ、新たな活動や関係を育てていく過程である。

このレポートでは、地域社会の持続的・調和的発展のため欠かせない「住民自治」の観点から、「地域の力」や「コミュニティ」づくりの現代的意味を再考し、同時に、「地域の力」や「コミュニティ」づくりの中核に「地域ケア」を位置づけることの意味についても論じた。いわば、福祉領域から提起する「コミュニティ論」であるともいえるが、暫定的ながら、本研究のテーマである「民俗としての福祉」概念の核心と射程を表現することができたとも考えている。

あわせてこのレポートは、これまでの「社会福祉の世界」が、「地域の力」を断片的に切り取ってしまうか、あるいは、それを地域という「場」からひき剥がして「利用する」か「囲い込む」結果に陥る場合があったという問題提起をも含むものとなった。逆にいえば、「地域の力」を、型枠にはめずに地域の歴史風土の根幹からありのままに捉えようと試みた本レポートを通して、同質の心構えと視点で自らの地域に向き合うならば、鏡合わせのように得られる個別的知恵があるのかもしれない。

### 5 今後の展開

以上の考察を経て、今私達は、35年前の岡村の記述を現実感をもって受けとめることができる。

「主として輸入文化に支えられた官製社会福祉や専門家の社会福祉論と、民俗としての社会福祉も、また二重構造的に考えられるけれども、重要なことは、民俗としての福祉こそが基底となって、その上に社会福祉政策や社会福祉文化が消長するということである。福祉の風土とは、まさしくこの基底部分であると考えられる。そしてこの基底部分が掘りくずされ、分解しないためには、外来の上部構造に対して、生活者の見解を対置させ、近視眼的な専門家や法律を鋭く批判しなければならない(岡村:1976)」

また今回の考察を通して、昨今ひとつの潮流となっている「共同体再評価論」の文脈で「岡村理論」を読み替えることがその理論の深化につながるのではないかと思うようになった。岡村は、「外来文化を換骨奪胎して使ってきたのが常民の文化」であり、そこに生まれる表層文化と基底文化の二重生活を表と裏、「晴れ」と「け」で使い分けるところに日本の特長をみていたが、いわば、「晴れ」の福祉(官製社会福祉、専門家の社会福祉)の土台としてある「け」の福祉(生きあう「生活者」の中から生まれる力)の発見、あるいは「福祉民俗論」とでもいうべき福祉論理の生成である。

今後も拡大する「開発」論理にしっかりと向き合いながら、この時代を乗り越える実践的論理として、演繹的・帰納的方法両面から「民俗としての福祉」概念の現代的可能性について追及していきたい。

### 【参考・引用文献】

- 1) 岡田哲郎・森本佳樹、「高島町における地域福祉連携教育の試み—民俗としての福祉」の視点からとらえなおす」、福山清蔵・尾崎新編著『生のリアリティと福祉教育』、2009年、誠信書房
- 2) 岡村重夫、「福祉と風土—民俗としての福祉こそ基底」、『地域福祉』通巻121号、1976年、日本生命済生会社会事業局
- 3) 岡田哲郎・八木田達博・森本佳樹、「地域に『自治』と『ケア』を取り戻す、結びなおす、ということの意味—『いつでんどこでん』の地域移行後の取り組みに注目して—」、『地域福祉研究』No39、2011年、日本生命済生会

※ この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

#### ①雑誌論文

岡田哲郎・八木田達博・森本佳樹、「地域に『自治』と『ケア』を取り戻す、結びなおす、ということの意味～『いつでんどこでん』の地域移行後の取り組みに注目して～」、『地域福祉研究』No39、2011年、P4-P17

#### ②図書

なし

#### ③シンポジウム・公開講演会等の開催

・立教大学コミュニティ福祉学会第3回年次大会「支え合う社会をどうつくっていくか—無縁社会の現実から」、2010年11月14日、立教大学新座キャンパス開催。「コミ福祉協の会」分科会にシンポジストとして参加。経済のグローバル化・超高齢社会における「コミュニティ」の現代的意味について発表した。

#### ④その他

・日本地域福祉学会第24回全国大会、「A町『地域ケア型実習』における『評価枠組み』構築の試み」2010年6月13日。「地域(の力)をいかに捉えるか」について、本研究の成果の一部を発表した。

・厚生労働科学研究費補助金政策科学総合研究事業『ソーシャル・キャピタルと地域包括ケアに関する研究 平成22年度総括研究報告書』(主任研究者:井上由起子、研究分担者:森本佳樹、筒井孝子)内「分担研究報告書 今後の高齢者介護における地域力(ソーシャル・キャピタル)の有用性と現状—大牟田市における地域交流施設へのヒアリング調査から—」(分担研究者:森本佳樹)に、研究協力者として参加し、一部執筆を担当した。「地域の力」および「コミュニティ」の現代的意味と活性化の諸条件について、本研究の成果の一部を反映させた。